

邦楽ジャーナル

月刊邦楽情報誌
Hōgaku Journal

昭和62年10月26日第三種郵便物認可
平成22年7月1日発行 [毎月1回発行] 通巻282号

7

2010 Vol.282



【特集】
追悼 横山勝也

【いんたびゅう】
富山清琴 (琴・三絃)

【ザ・こだわりすと】
美鵬直三郎 (民謡太鼓)

あべや金三郎・銀三郎 (津軽三味線)



大学仲間、演奏に、竹掘りに

末森嘉治よしはるさん・洪里勝信こうりさん
西口幸則さん・藤原祥延よしのぶさん

大坂府在住の、末森嘉治さん、洪里勝信さん、西口幸則さん、藤原祥延さんは、関西大学の邦楽部とともに尺八に打ち込んだ仲間だ。卒業して40年余り、定年で時間にゆとりが生まれた人も増え、毎月2回ほど東大坂の渡辺綾山師の元で民謡や歌謡曲を吹いて楽しんでいる。「現役時代は仕事が忙しく、年に1度演奏会で吹く程度でしたが、5、6年前からに毎月2回吹くようになると、体が思い出すのか、音が出るようになってきました」と藤原さん。西口さんは製管も手掛けており、大学仲間の多田さんから「ウチの竹藪に掘りに来ないか」と言われたのがきっかけで、他の3人も小旅行気分です香川県へ同行することに。洪里さんは今も会社経営で忙しいが「将来時間ができ



竹掘りの様子

たら自分でも尺八を作ってみたいので、その勉強も兼ねて竹掘りに参加しました。もつともその後で仲間とワイワイ飲み食いするのが楽しみでもあるのですが」と語る。今年3月に掘った竹が油抜きされ尺八になるのは2年先だ。

4人の中で先輩の末森さんはこんなエピソードも教えてくれた。大学時代に演奏旅行で沖繩を訪れ、舞踊家の真境名佳子まきまのよしのこさん、その弟子で末森さん達と同年輩の瑞慶山和子すいけいさんさんにお世話になった。05年に真境名さんの葬儀のため皆で沖繩を訪れ、そこで瑞慶山さんと40年ぶりに再会し、「皆で彼女の舞踏会を東京の三越劇場まで応援に行きました」。演奏に、竹掘りに、青春のアドナンの追っかけにと、大学仲間が一生の友となって共に楽しんでいる。

左から藤原さん、末森さん、洪里さん、西口さん



アマチュア ばんざい

親子3代で太鼓が夢!



2010年4月10日成田にて

成田太鼓祭で、ひとときわ輝く笑顔がステキな女性が目に留まった。「太鼓をたたかとうれしくて、どうしてもニコニコしちゃうんですけどね」と語るのは千葉県習志野市在住の萩原洋子さん。

萩原さんは「主人の転勤でアメリカに4年ほど滞在した際に、子どもが通う学校で和太鼓や盆踊りなどの日本文化に改めて触れる機会があった。帰国後、中学生になった娘さんが「太鼓がやりたい!」と、近くの公民館の太鼓教室に通いはじめ、その追っかけをするうちに萩原さん自身もウズウズ。太鼓歴は10年くらいになるという。

太鼓を習い続けるうち、老人ホームなど地域へ演奏に行きたいと思うようになり、「和太鼓祭 雷夢」を04年に仲間6人と立ち上げた。みんなでヘソクリを出し合っただけで、太鼓を買って、天気がよければ近くの茜浜に太鼓を並べ、海を見ながら練習に励み、今や仲

間は約40人(大半が女性)にまで増えた。「お客さんに喜んでもらいたくて、手作りの花笠を使ったり、踊りを入れたり、主婦の知恵を出し合っただけで工夫しながら楽しんでいます」

萩原さんの本業はピアノの先生で、作曲はお手のもの。「雷夢」のオリジナル曲はもちろん、今は家族でバンドも組んでイベントに出演するなど常に音楽に囲まれた生活を送る。「夜の12時から防音のピアノ室に家族が集合して部活のように練習したり、時間があれば何か音楽をやっています」

今後の夢は? 「お世話になったアメリカの小学校で、いつか恩返し公演が出来たら。娘は今26歳ですが、できれば親子3代で!」

萩原洋子さん

